

眞生

第 四 卷 八 月 號

- ◇ 日夜に過ぎ行く吾等の壽命は一刻として停まる時とはなく恰も流る水のその如しである。而て其の生命は之を使つても使はなくとも過ぎ逝くことに於ては變りはない。
- ◇ 然に世人はともすれば自ら働くことを厭ふて自分の命の徒らに過ぎつゝあることを知らないものかのやうである。
- ◇ 乍然かくの如きは眞に醒めたる人々の果して堪えうる所であらうか、吾等は考へなき能はずである。
- ◇ 一錢の金も無駄に使ふことは少しく考へあるものゝ忍びないところ、まして使つても無くなり、使はなくてもなくなる生命を誰がこれを使はないですむものがあらう。
- ◇ 金銭は貯蓄もできる、そしてまた、一度無くしても亦時によれば再び得られないこともない。
- ◇ 乍然一度失つて再び得られないものは生命ではないか。而て亦それは一時として之を延ばすことも蓄積することもできないものである。
- ◇ 然に今日の人々は果して此の眞實を知つてゐるのであらうか昨日も徒に暮し、今日も亦徒に暮さうとする。それこそ醉生夢死の人々ではないか。
- ◇ 然は友よ、吾等は如何に生くべきぞや、献身の大業、正に人類の最高生活に生くべきである。價値ある人生、意義ある我として眞に生るがほんどうの我ではないか。——(念)——

吾は何處に來たのか來たまでのあかる

目次

●吾は何處に來たのであるか	念
●新宗教の出現と其の内容	土屋 觀道
●懺悔録(二)	濱 阿 彌
●お念佛よ	山口 常照
●光明の生活	佐藤 忠義
●吾朋便り	

▽佛を信ずるといふ事は佛に頼ることである。佛に頼ることは佛にまかすことである。

佛にまかすといふことは如來の願船に乗せられて、一切を託し無力になつてゆく事のやうに思ふ。而しそれが佛の儘になつたのではない。

△船に乗せられた以上は手も足も出ぬから船の行きなりに委かして、結果がどうならうともそれがお慈悲だと喜んで行かうと云ふのぢやない。他力、易行といつても手ぶらで運んで貰ふ事とは違ふ。

▽如來の運船の中へ攝め取られてゐると云ても、「悪性更らに止み難し」我儘心が後から後から出て來て「無有出離之縁」と悲しまざるを得ぬ、而それでも亦如來さまの光明に漏れては居らぬと喜んで見る、喜び乍ら悲しみ、悲み乍ら喜び、改まらぬ儘で救はれてゐるやうな氣持して、船ぐるみずんく地獄の底へ落ちてゆく、そして氣が附いて見ると佛誓の艦が火中である。

▽信仰は佛と乗合になる事でもなく、又佛の願分へ割り込まして貰ふことでもない、如來と一つになるといふ事は如來と同船することではなく、「如來の佛心と一つになる」ことであり、又「南無阿彌陀佛に身を丸めたること」である。即ち本心に還り、本來の清淨心に活かされてゆくことである。船に乗せられてゐる居ぬではなく、行くとして船ならざるなき常住心を云ふのである。道元禪師が「万法に證せらるゝなり」といはれたのは此至心に返ることである。(尅)

我そのものを因縁所生と思つてはいけない。靜に其の源を尋ねれば即ち宇宙の本源より來た者である。單なる有限の自分ではない、無限絶對の眞我の顯はれでないか。生死因果の自分ではない、不生不滅の自性其のものである。されば吾等は單なる小我の自分ではなく天地と共なる神人の吾等であるよ。滅すると思ふもそれは眞實の滅ではない、單に生れたいと思ふのも單なる有限の生ではない。本來不生不滅の我そのものが此の土に因縁によつて出現して來たのである。されば吾人は宇宙の本源より來る。而て、宇宙本源の如來の佛子が自分であるのだ。現在の此の身や此の心は或は因縁の所生とも云へる、されど眞我そのものは因縁の所生ではない。因縁そのものによつて生滅せらるべき我そのものではないのである。我は我であり、我の他に我はない、我は絶對そのものである。因果を超えたる我であるよ、一切は宇宙の本源より來る。而て我も亦この宇宙の本源より來る。友よ眞實の自己を見よ。(念)

新宗教の出現と其の内容

土屋 觀 道

一、新宗教は時代の要求から起る

昔から幾多の宗教が此の世に現はれて來て來るが其の出現の宗教と其時代との關係を見るに、多くは時代の要求から新宗教は現はれてゐる。

尤も一面から見ると如何なる宗教も其の時代の壓迫を受けない宗教はなく、殊に將來に於て大なる宗教として多くの信者を有するに至る新宗教に限つて一層に其の時代の壓迫を受けないものとはならない。従つて、或は之が爲めに反つて時代の要求に相反しているかのやうにも見られないこともないのであるが、乍然其の實之はたゞ一部の既成宗教若しは既成宗團の思想及信仰の相違から來る一種の一次的迫害であつて、決してそれが來るべき時代の要求に反してゐるからではない。従つて一宗の正に新に起らうとする時代には必ず起るべき時代の要求があるからであつて、此の要求なくしては決して眞實の宗教が現はれて來るものではない。

而て此の事實は已に古來の史上に明に証明せられてゐるところであつて、如何なる時代にも必ず新なる宗教の起る時代には其の時代が其の宗教を要求してゐることを見る。

然に其の新しき時代要求の背景には又更に社會組織の一大變化が來ていたのであつて、之を逆に見れば

社會組織の一大變化が出現する時代には必ず之を背景として、社會生活及社會思想の新しき變遷はやがて舊き思想者は舊き宗教にあきたらずして更に新しき思想及生活に一致したる新宗教を求むるに至る之に應じて此の世に現はれて來るものが即ち新宗教の出現である。

二、既成宗教が時代を教ふことができない時

換言すれば社會思想の要求を産み、此の要求は更に之を充實すべき新宗教を要求する。然に舊き宗教は舊き思想及び其の思想の社會生活に要求せられて、其の宗教が其の教へるべき内容が形式を變へざる限り此の新時代の要求に一致することはできないのが當然である。従つて新しき時代の要求は之等の既成宗教を捨て、新しき要求を充すべき新宗教を求むるに至るのである。又之を言かゆれば既成宗教が其の時代を教ふことができない時、新宗教が起つて來るとも云へる。乍然何が故に新宗教が起つて來のか、又何が故に舊き宗教は時代を教ふことができないかといふことは要するに社會組織の變遷につれて時代思想の變遷によるからである。何となれば人は此の世に於て常に生存と向上の欲求にある。然に此の生存と向上との欲求は自から社會生活の上に常住に表現せられ、此の欲求の生活が自ら社會組織の變遷を來たし此の生活を充たす爲めに其の思想も信仰も其の内容を變化して來るのである。然に既成宗教は其の昔、其の當時の生活に相應すべく現はれた宗教であり、又それに會すべく教へられた教義であるからして時代の變遷につれて、其の内容が舊くなるのであつて、時代が變れば變るほど其の教義が時代思想に入られぬことになるのである。而も時代が變るにつれて前時代の思想と現代の思想とが適合によつては全く反對の方面に現はれて來たとき、即ち新舊思想の衝突となつてくる。此とき舊き宗教は舊き時代の思想の中に力を以つて新しき思想及び新しき宗教を否定しやうとして來るのであるが、乍然時代は

刻々として舊きより新しきに流れ、舊き人は死に新しき人は生れるのであつて、次から次へと生れて來る青年、若は有識の人々がいつも新しき思想及宗教に讚成し其鳴るところから、自づと舊き思想と宗教とは社會に入らず、自づと衰微せざるを得ないのである。茲に於て其の初めには舊き思想と宗教とが有勢であつて、之に反する新しき思想と宗教とに對してあらゆる迫害をも加へるのであるが、乍然時代の變遷は新しきものゝ勝利となり、舊きものゝ衰退となるは當然であつて、愈々時代の思想が成熟して來るに従つて、今度は舊き思想や宗教では此の世に生存することもできなくなつて來るのである。

三、時代に追従する宗教

さうなつて來ると時代は一切舊き宗教を顧みなくなつて來、又かゝる宗教の教義の中に居る人は時代の思潮の壓迫を感じて、其の苦しさに堪えずして、其の教義の内容をできる丈時代的に解釋して其の中に自己の内心に起つて來る時代精神と調和しやうとし、又外に向つては此の説を以つて時代の思想に迎合しやうとするのである。従て既成宗教がどこまで其の生命を維持しうるかは要するに此の時代の思想とどこまで一致しうるかと云ふ點に於て定まると云ふべきである。従て若し既成宗教にして此の時代の變遷に伴ふことのできないものは自ら時代に遠けられて、やがて衰滅の浮身となるのであつて、此の世に役せぬものは此の世に存在せぬとの生物學上の原則に此の宗教までも一致するのである。従て舊き宗教は此の時に當つてはたゞひたすらに新しき時代と其の思想とに一致すべく、無理に注釋を試みるのであつて之を高所より達觀すれば吾知らず只専心に時代思想の追従に過ぎないのであるが、乍然その追然そ追従も遂に力なく、愈々其の教義が其の追従をも許されぬほどに個定化するときはその宗教も全く死滅し終るのである。

四、新しき宗教への迫害

之に反して新しき宗教はいつも時代の要求から起る。従て其の初めは舊き時代や舊き宗教によつて強き壓迫を受くるのであるが、眞に來るべき宗教はむしろかゝる當時の壓迫の中からこそ新に起るとも見られるのである。何となれば從來の思想や宗教で満足ができるものならば別に新なる思想や宗教が起る必要もないのであるが己に時代の進歩社會の變遷は從來の生活や思想で満足する事ができぬ所からして之等の思想や生活にあきたらずして、其の人生の根本要求を満たすべく更に新しき思想と宗教とを求むるのである。従て從來の思想や宗教に相反することはむしろ當然といはねばならぬ。乍然斯如き新しき宗教はよほどの先覺でない限り此の時代の根本要求を達觀することはできないのであるからして其の初め是等の思想や宗教は容易に社會の表面には現はれて來ないのである。従つて之に對する上層社會も之を大なる力として敵視することもなく、何等眼中にも置ないのであるが、時代の變遷進運はやがて其の新しき思想と新しき宗教に傾いて來るに従つて急げきに其の勢力をばり、又しきりに舊き社會の思想生活と闘ふに至つて初めて舊き社會の人々は此の新なる思想と宗教とを壓迫して來るやうになるのである之が即ち新しき思想と宗教とが社會から強き壓迫や迫害を蒙る理由であつて、之また自然の道行きである。

五、今日は時代の過度期

然に今日は如何なる時代であるか、而かも時代と宗教との關係は如何私共は以上の道理を以て靜に時代の變遷を見れば少くとも歴史の事實は己に封建的代時は過ぎて、金權中心のブルジョアの時代となり而かも其の時代も亦更に轉じて社會主義的時代思潮の一大傾向となつてゐる。而も此の間に於て既成の

宗教は如何なる状態にあるか、そこには面白い時代の影響がある。而も今日の多くの宗教は主として封建時代に永い間培かかれた宗教であり、又永い間封建時代を教養して来た宗教であつた。従て今日の既成宗教は主として其の時代の生活に都合よい思想であり信仰であつた。然に我國に於ける明治の維新は此の封建を破つて、立憲の時代となつた。而も此のことは一面から見れば外國の要求によきなくされて開國となり、立憲政治となつたのではあるけれども、之を内面から見ると即ち國民の生活が正に封建制度では行けなくなつて、民権主義となつた所にあるといはねばならぬ。即ち此の時に於ける國內の思想は封建思想と民権思想との衝突であり戦いであつて、此の戦いに勝つたのが即ち封建が倒れて民権となつた所である。然に此の時に於ける宗教は如何なる態度であつたか、彼は一へに信仰の々條に捕はれざる教義のみかじりついて、而も其の注釋は主として封建時代の生活に適するやうにのみ色つけられていたのであつた。たゞ一部の國學者並に其の國學者の間に傳はつた神道一派が君王政治に力をいたして封建制度を倒さうとしたに過ぎず、其の他はむしろ封建思想の守舊派であつた。従つて維新當時に於ける佛教が是等の封建思想に反對せる新思想階級に入れられないはもとよりであつて、吾々之等の人々に佛教が無視せられた所以である。然乍かゝる有様であるにかゝり、尙其の佛教が既成のまゝに、幾分の生涯を維持して来たことは之等の封建が急に倒れてブルジョア階級の時代となつたけれども尙一般の下層階級は未だ維新の精神を知らず舊き思想そのまゝの慣習に生きてゐた爲めに、此の舊き思想とその慣習が今日の佛教を保持したと見るべき點が多いのである。

然に時代は更に轉じてブルジョア階級を打破して、労働階級の思想時代が現はれて来た、而も此の思想はしきりと金権階級と争闘の地位に立たうとしているのである。従て此の階級が封建思想に生きやうとする舊き佛教に共鳴することのできないはもとよりである。而て此の意味に於て、今日の既成佛教が少くとも多くの民心を失いつゝあることも亦當然といはねばならぬ。

六、ブルジョアの宗教

然にこゝに面白きことは近來多くの有産階級の人々に舊佛教に入る人の多いことである。それは維新當時に佛教を捨てたる彼等は封建思想を捨てた結果として、それ等の思想に充ち充つた佛教を捨てたのであつたが、又そうすることが生活上の便宜でもあつたが、今後労働階級の思想及びそれ等の階級と争闘の止むなきに至つて、彼等はプロレタリアの共同の適とせられ封建思想の階級と手をとつて之に當ることとなり、之等の思想を助くる舊佛教の思想に共鳴し、又之等の思想の中に生きる宗教を喜ぶことになつたのである。之が即ち今日の所謂佛教をもてあそぶ特權階級の宗教である。さうして又之が近來既成佛教が少くとも其のまゝに宗教として幾分の盛大を盛返して来た點である。乍然かくの如きの宗教が來るべき時代の思想と要求とを充分に充たし得べきものでないことは明かであつて、少しく新に生きやうとする人々は到底かゝる宗教に入るべくもないのである。

然ば如何にして佛教が復活することができるのであるか、こゝに着眼して、舊き宗教の中からも時代の思潮に合はすべく、新しき注釋を試みつゝ、其の中に時代の思想を盛らうとするものがある。乍然之は要するに新しき時代の指導者ではなくして、ひとへにそれは新しき時代への追従者に過ぎぬ。従ていつかは其の教義が遂に其の時代に入れられなくなり、又其の時代に追従されなくなる時其の宗教は惜げもなく其の時代から放鄭せらるゝことも明かである。

然ばこゝに來るべき宗教は何であるか、そして又如何なる内容を持つた宗教でなければならぬか、凡そ新しき宗教の起る時、必ずそれが時代の要求から起り、又それが必ず時代の要求に應ずべきものであるならば、來るべき今後の宗教が如何のものであり、如何なるものであらねばならぬかは少しく注意を時代の要求と社會思想の變遷とに放さざる人ならば語らむして自ら明なる所ではあるまいか。而てそれは少くとも時代の要求に一致した宗教でなくてはならないことは明かであると共に今日已に行はれた既成宗教でないことも亦明かである。從て今日のやうな封建的や金權的な宗教でなくして、民主的な平等の中にすべての自由と平和と慈愛の宗教であらねばならぬことも明かである。いはい今後の宗教は來るべき人類の生活に向つて正しく真人の自由を興へる愛の宗教でなくてはならない。從てかゝる今後の宗教は今少しく社會主義的傾向を多分に抱含し得た慈悲の宗教でなければならぬ。即ち最高の理想を最も容易く誰にでも行けるといふものでなくてはならない。

乍然かくいへばそれは社會主義者の云ふことだと之を嫌はうとする人があるならば、それは甚しき誤りである。何となれば、かゝる考へは封建思想や、金權階級の人々の心に影した過去の惡習であつて、決してそれは公平なる社會の見方ではないからである。そして又かくいへばとて私共は決して自ら社會主義であるのでもなく、又今日の如き社會主義が決して永遠の社會進展に於ける最高の地位を占むものであるとも思へないからである。從つて今後の永き將來に於て來るべき眞實の宗教が社會主義的宗教であらうとも思はぬ。乍然こゝ暫くは此の社會主義思想の勃興せる際に於て今後來るべき宗教が此の思想を充分に取入れることなくして此の世に現れうるものとはどうしても思ふことはできない。而て最後に來るものは全人類の向上發展を中心とする實生活に即したる宗教であらねばならぬ。それが私共の要求する新しき宗教である。 — 七・二七 —

懺悔錄

(二九)

演 阿 彌

おゝ如來様よ。私は思へば思ふ程本當に小さい者であります。全く力の無い私でも如來様の御方に促がされるれば爲し得ない何事もないと確信して居りながら、夫が何時も其爲し得る力の根元を忘れて、何事もなし得ない自分斗りを一人立にして之を眺め批判しつゝ、人知れず自ら悔ひ自ら悲しんで居ります。本當に本當に憐れな私でありませぬ。イヤ私は決してアナタを忘れては居りませぬ。私はアナタの慈愛を離れては生きて行かれぬ者であります。夫にも拘らず私の不良なる浮浪性はアナタから離れて或は賣名に走り或は利益に従はんとしたりして、再び三度自らの非力を知り四たび五度自らの無智を悲しんで獨り竊かに悔ひつつあるものであります。考へる迄もなくアナタの慈愛は所謂肯愛に非ずして、敢然として正義を行ひ得る所の其強い力が興へらるゝ事だと知り抜ひて居る私には、入信前後に於けるいさげなき心か

ら望む様な母の愛とも云ふ可き愛へのねだり心にはどうしてもなり得られなくなつて居ります。今も申しました様に私の本心の満足が直にアナタの愛であると共に、私の本心の不満足が其儘アナタの惱みで有り而して夫こそアナタの遺瀨なき慈悲の涙では無からふかを思ふて尙更らに私自身が悲しまれるのであります。此時興へられて有る者はアナタと直接に御話し得る處の「御名の呼びかわし」であります。南無阿彌陀佛と呼ぶ事に依つてアナタに訴へアナタに祈りアナタの中に飯へり行くのであります。而して此事のみが今の私に取つては唯一の喜びであり安らげさであります。然様です。ね。モツト的確に云ふならば悲し淋しい而して嬉しい安らげさであります。此安らげさが何故に悲しいか何故に淋しいか、アナタは知つて居て下さい。而して其の私の心根を却て喜んで居て下さい。併し知らない人達は云ふでせう、「夫は一種の避難所である」と。而して又云ふでせう。「夫は救はれて居ないのだ」と。何でもよいのです。一切はアナタが知つて居て下さるので

すから云ひたい人には勝手に云はして置きませう
私には今其安らげさが淋しいけれど尊く悲しいけ
れど嬉しいので其悲しい淋しい其儘が私を慰め私
を温めて居るのであります。噫々。さるにても偉
大なる如來様よ。アナタの其偉大なる御力の中に
私の古る里のあると云ふ事は、私に取つてどれ丈
け大きな安らげさでありませう。私はアナタの子
であると共にアナタから假りに使はされた使し者
であります。而して更らに云ふならば眞如海中の
一泡沫であります。アナタは私を唯だ何等の理由
なしに産みなしたのでは有りますまい。多くの人
達と共に協力してアナタの御國を建設せしめんと
する爲めに其委員の一員として否な其土工の一人
として此處に生み出し玉ふのでありませう。つま
り私は單なる私ではなくて如來様より使はされた
一種の化け物なのであります。如來様は元との私
であり私は如來様の一化現であります。之を手前
勝手の心から云ふならば私は私の本流なるアナタ
の爲めに此處に出て来て上げて居るのです。然る
に淺墓にも化物たる事を忘れ使はされた者が使は

された本分を忘れ果て、空虚な毀譽褒貶の八風に
動かされおびやかされつゝ有ると云ふ事は何と云
ふ腐甲斐ない事でありませう。泡沫には泡沫とし
ての本領があります。化物には化物として本分が
あります。其本分本領を忘れて徒らなる事に左右
され翻弄せられんとするは何たる拙さ何たる愚さ
で有りませう。私は私の本來の面目を忘れて假現
の自己に執着しつゝ夢にも均しき物を實有と思ひ
なして其消行行く事に有りもせぬ自力を勞費する
故に、私の一擧手一投足は空ごとたわ事徒ら事に
なり終つて了ふのであります。噫々。如來の正見
よ。而して私の正命よ。要するに私は私にだま
れて居るのです。「馬鹿奴！。何をして居るのだ
と我身を叱り乍らも何時の時の間にか毀譽に左右
せられんとして居ります。「諸行の推移」。夫は一
時止まる者ではありませんまい。然も推移は推移の
儘に悠久して長閑であります。夫なのに何時と
はなしに迷雲重なり來つて其推移生滅の實相を如
實に達觀し得ないで、何時も々々あきたらない毎
日を送り迎へつゝある淺間しき！。本當に愚か者

です。噫。南無阿彌陀佛よ。南無阿彌陀佛の如
來よ。如來様こそ眞實であり、而して其南無阿彌
陀佛の外には一切の何者も無いものを、何故にか
く聲と分別し如來と分別し我と分別し森羅萬象と
分別して其處に現はれる小善を喜び小惡をくんで
清濁共に合せ呑む事も得爲す常に微笑し常に悠々
たり得ず、徒らに精根を費さしめ空しく勢力を勞
らさしめて居るのでせう。此世に生を得てから最
早四拾二年であります。其越し方を靜に觀すれば
唯だ茫々然として蔓の様であります。信仰に人ら
ざる以前は暫く之を問はずとするも、入信以後の
二千里、果して本當に私は安らげかつたでありま
せうか。此間幾日無爲泥洹とも云ふ可き満足の日
があつたでありませうか。有頂天になつて歡喜に
満ちた時もありませう。「我撰ばれたり」と思
つて得意だつた事もありませう。然し夫は感情
高潮の一時に過ぎません。信仰陶醉の一時に過ぎ
ません。少くとも今の私は其時より眞面目であり
而して其時よりも落着い居ると思つて居りますが
然も現在の状態は不満足で一杯になつて居るので

あります。私は云ふのも耻かしいけれども、何だ
か私其物を悟つて來た様に思つて居ります。併し
夫れも畢竟は迷ひでありませう。つぶさに私を觀
察する時、私の外觀は余りに拙う御座います。私
は狹量であります。私は小膽であります。私は見
得坊であります。私は我儘であります。私は懈怠
であります。私は神經質であります。私は無智無
學であります。私は惡を平氣で致します。私は善
を明日に延ばさんと致します。私は常に晴れ晴れ
しくありません。私には愛嬌がありません。私に
は織見がありません。私には思慮熟考がありません。
私には恒心恒産がありません。私には強い心
がありません。私には慈愛の充實がありません。
私には喜びの静けさがありません。私は要するに
薄情で弱志で暗愚なる者であります。噫々何たる
愚人、何たる變人、何たる小人下劣人でありませ
う。凡人と云ふ言葉はせめてもの私に取つて羨ま
しくなつかしい程のものであります。イヤ之も迷ひであ
りました。元と元と眞如から隨縁して假現せる身
の今更に何を望み、何を所得せんとしませう。畢

竟は望む可き何物もなく所得すべき何物もありません。ものを所得せんとする私も所得せられんとす。理想も要するに一真如の化現相に過ぎませんものを。悔むも不可、望むも不可です。噫々私は唯だ私の流れの儘に凡ての人と許るし合ひ凡ての人となつかしみ合ひ、凡ての人と融け合つて本當にしつくりした氣分で行きさへすればよいのです其處に自然法爾として眞實の價值行があるのです而して其處にのみ無理のない淨佛國土成就衆生云ひ換れば凡ての人の淨化があるのです。而して夫は如來様に南無して行く處から生れて來るものである事を確信して居ります。噫々。如來様よ。お父様よ。なつかしい私の古る里よ。一心に如來様に南無する時のみ眞實であり安住であり無爲であります。如來様夫れでよいのでせうね。然様です夫でよいのです。夫でよいのです。多きを望むと憐みとなります。唯だ當面の仕事に南無阿彌陀佛を打込んで行きさへすればよいのです。而して夫が此世に出て來た私の本領本分であつたのです。噫々。さるにても如來様の使命を完全に果たし得

おー佛よ！ (六)

山口常照

おー民族的使命の念佛！

排日移民法案通過

晴天の僻瀝

そは單なる排日と見る勿れ

人種的民族的反逆

白色人種の黄色人種に對する

最後の而も最大の屈辱！

されど怨むな憎むな

時代は進めり

同躰大悲の大慈實現の時なるぞ！

小なる排日的敵愾心を捨て、

血迷へる彼等を擁護せよ！

宇宙生命の佛陀大悲の大理想を示せ

憎むをやめよ

争ふをやめよ

亞細亞民族奮ひ立て！

我等亞細亞民族は佛陀大悲中心

ざる私！。夫は私の最も大なる懺悔の一つであらねばなりません。如來様よ。許るして下さい。私には幾多の矛盾を持つて居ります。どうぞ一日も早く此矛盾を整理して而して化現者としての本領を發揮する様、常に正定に安んぜしめ常に正恵に光あらしめ常に正命を續けしめ給へ。お、私の私の如來様よ。(完)

之で完結にするのは少し物足りませんが余りに永くなるのもいけませんから一先打切りに致します。かなり誤植もあり一二行抜けて居る箇所もあつた様ですが(而も其三はどうしたわけか誌上に出ませんでした)大体に於て表現の仕方が拙劣であつたかと思ひます。又頁數をキチンとする爲めに少し無理をして書いた場合も多いし、ツイ肝要な事を書洩らした恨みも多々あります。此故に今一度書き改めて一冊にまとめて見たいと思ひますので、是非皆様の忌弾なき御批評を拜見して其の参考に資したいと存じます。どうぞ御願ひ致します。

彼等歐羅巴民族は耶蘇大愛中心

大悲大愛一なれど

ともに目覺めず迷ふなる

提携平和の時は來ると思ひしに

俄然排日の法案通過

愛は亡ぶ！ 愛は亡ぶ

大悲進めよ！ 大悲進めよ！

大悲を示し争ふ勿れ！ 戰の時に非ず

亞細亞民族奮ひ立て

佛陀大悲を中心し

さるにしても

亞細亞民族奮ひ立て立つは

抑々何れの國民ぞ

使命は降り使命は降り

あゝ祈りなきを得ん

おー世界的使命の念佛！

歐洲大戰の血の洗禮を受けて

人類本然の愛にさめかけた

平和は全地球を蔽ふた

すべての人類に平等に與へらるゝに

人類はなせこの光明の生活に

來らざるや、何故に

この光明の生活をとらざるや

多衆はこれを知らざるなり

我等は福なるかな

眞理に立ち眞の念佛にて

常に風の如雲の如

海の如太陽の如く

更に／＼により偉大なる

宇宙の本心を

己が生活にあらはして

向上のひとすじみちをひたすらに

進みて止まざる生活なり

居るときと云ふものが大切になりそれに餘暇も余りにないので失禮するばかりです

私が寺院生活をした頃から思ふと生存の意義がハツキリとわかつて來ての上の仕事のやうで朝の風

呂水一杯汲むのも自分を教へてくれるやうに思へ

てなりません。そして本當に自分の身を祈つて

時その祈りが人への祈りにすでになつてゐるやうに

思へてなりません。それが今までは言葉の上で自

己愛は即ち他愛だなんて云ふてたが余りそれがも

つたいない言葉のやうに思へてなりません。

今日も黒田さんの聖フランシスを讀んでます眞面

目な筆つきで書いてあるので思はずも引き入れら

〇吾朋便り

南無阿彌陀佛

土屋先生

大變御無沙汰してます皆様おかわりも御座いませ

んか御たすね申上げます

私の方もおかげで皆元氣に暮してますから乍他事

御放棄被下さいませ

いつでしたか東京の方へ行つたついでに一寸御た

づねしましたら九州行でしたので神谷さんに一寸

お會して歸りました職業を持ち遠い所から通つて

れてゆきます。何うしても眞剣に動いて來た人の

傳記にはそうした強みか多くあるのです。如來を

抱いてる人神を祈つてる人に接するとやはり忘れ

やうとして忘れられぬ強さがあります、それを思

ふと金の力や勝手に云ふてる權威で人を動かそう

としてる人はその人の所を一步でも去るともうそ

の人を忘れてます。本當に人から忘れられない人

になりたいたい人でありたいそれを念して止みませぬ

私は今實業(?)の方面へ足を入れてきてますけれ

其金を作らうと云ふ氣にはなれませぬ。人は子供

の爲めにと云ふて金を作るか私は今生れやうと

してゐる子には頭だけ作つてやりたいと思ふてま

す。子供の道樂するもとでや安慰をむさぼるやう

な金を作る位ならドブの中へ捨てます。それもも

つたないから金を作らうとも思ひませぬ。然し

私が余り不生産的な物質的にも精神的にも人とな

つて來てるからせめて私より一步でも二歩でも生

産的な人になりたいと思ふてる、それは未だ生れぬ

子にそう云ふ無理な望を持つてると云ふだけ

のことと實際生れて見なければ何んとも云へませ

ぬ。

著いので讀書の方からも大分遠さかつてます、先日は薄田氏の茶話を面白く讀みました、皮肉丈

か少し頭へ残つてゐるやうです。

寺に居る關係か念佛だけは忘れませんが、然し余り

澤田申せないのか口惜しう御座います、先日神谷

さんにお會ひした時に土曜に座談會と別時を少し

づづでもやりたいと申して見へましたが遠くて去

つて私には本當にそれが待ち遠しくてなりませ

ん何にか一つやつて下さるなら、それを機會に月

一回でも二回でも皆様とお會ひすることも出来る

にと思ふと一層そうした機會が欲しいやうに思ひ

ます。何うぞ何れかの時からでもそうしたう御座

いますから座談會でもおつくり下さいませれば幸

と存します。

今日は宿直でしたので一寸ガラスペンを走らし

ました。

何うぞ奥さん初め神谷さんの皆様へよろしく申上

げて下さいませ、又と會ふ日を樂しみにしてませ

合掌

大橋俊高拜

□ 觀道より、私の昨今

一、一寸したことでも思ふやうにならぬと人の心は晴々しくないものです。まして命をかけても傳へたいと思ふ天地の大道を心から裏切られるほど人の心にはやな感じのするものはありますまい。それも其の人が初めから社會的地位もなければ又人としての人とするにも足らぬ所の人々からかゝる扱いを受けるのなら容易に忍ぶこともできませんが己に其の人を信用し、人格視してゐる人々から、かゝる淺ましい態度に出られるとき私共の心は一層汚されたやうな感じを覺ぶるものです。乍然之も亦靜に人生を眺むればさうりと過去に流されて行くことのできるのを嬉しく存じます。悠久たる天地の間、何物

か私共の心を永劫に妨げうるものがありませう。私共の心にはたゞ正義あるのみです。二、眞生は六月休刊し、七月日延べした爲めに規則違反のことで第三種郵便物としての認可を取消されました、返すがへすも残念千萬でありましたが、乍然之によつて得たことは更にそれ以上でありました。而て此のことによつて與へられました私への經驗が將來の力となつて社會に活き働くことのあるべきを覺悟して喜んでゐます。讀者も今暫く辛抱して下さい。必ず喜ぶ来る日もありませう。三、信州唐澤三昧會は七十二名からの集りでした。此の外に二三名時には二十名許りも上諏訪の町から加はられたときもありましたが、それでも道友の熱心さは少しも不平

の起るのを見ませんでした。否不平どころか何れも限りない喜びと望みと力とに満ちて下山せられない人はありませんでした。昨年の集いは近來にない緊張味を以つて行はれたのでしたが、今年こそは更にそれよりも一層強い熱心さでした。

四、何事でも當てくだけろです、やらねばすべては死あるのみ、道の爲めに眞に生るの

が何よりませう。

誌代は次號に。

寄費 一部十錢 半年六十錢 一年一圓

振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 發行所 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

印刷所 眞生社

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 眞生社

(大正十四年八月十三日) 大正十四年八月七日印刷納本

(毎月一回十三日發行) 第四卷第八號